Shirayuri College

『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐる道徳問題

朝　日　由紀子

マーク・トウェインの最高傑作『ハックルベリー・フィンの冒険』は、アメリカ文学の古典としての地位を確立している作品であるが、一方、その語り手ハックルベリー・フィンがこの世に登場したときから、社会的な排撃が起こり、以来、時代風潮のなかで社会道徳による断罪が批評家の評価の仕方に影響を及ぼしてきた点で、特異な作品である。この経緯をたどることは、必然的にアメリカ文化の深層と断層を知ることになろう。

1

『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐるアメリカにおける批評は、文学研究の立場にとどまらず、社会文化的な色彩が色濃く反映したものであった。この作品は、予定より遅れて1885年2月にアメリカ版が出版されるが、３月、マサチューセッツ州コンコード公立図書館から禁書処分をうける。ジェイムス・コックスの他にも多くの批評家が、この点を踏まえて論を展開しているといってよいほど、その事実は、この作品の一面の評価を物語っている。その理由は、「粗野、下品」であり、「知的で、リスペクタブルな人々にはふさわしくなく、スラム街向きである」というものであった。コンコード市民を代弁して、『若草物語』を書いたルイーザ・オルコットは、マーク・トウェインが、純真な少年・少女のための良い本を書けないなら、それらの若い人たちのために書くのを止めるのが最善で

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

あった、と意見を述べている。当時の文化的主流であった「お上品な伝統」と、この作品が少年・少女向けの物語と受け取られたことからの、批判であったと考えられる。

こうした批判よりもさらに論議が喧しくなるのは、この作品が人種問題に抵触するとみなされるようになった1954年の合衆国最高裁のブラウン判決以降のことである。その明白な例が、1957年のニューヨーク市教育委員会による「教科書問題」であり、当時はアーカンソー州リトルロックのセントラル高校で黒人の生徒の通学を阻止する激しい争いが行われていた時期でもあった。審議の結果、高校の教科書リストからは除外しなかったが、小学校と中学校で教科書として認めないことが決定された。1960年代以降、とりわけ、この作品に使われている「ニガー」がアフリカ系アメリカ人にとっての差別的表現であることから、公立学校における教科書問題が争点となっていく。

こうした動向のなかで、言葉の用法上、看過できない問題もあったことも事実である。アフリカ系アメリカ人たちの感情を害する言葉「ニガー」が作品中213回も使われていることは明らかであるが、「ニガー・ジム」という呼び名は、作品中一度も使われていないにもかかわらず、出版時から今日まで、誤ってその呼び名が繰り返し使われ、定着してしまった感がある。ジョナサン・アラックは、その問題を取り上げ、影響力をもつ批評家たちがいかにその呼び名を用いてきたかを例証する。バーナード・ドゥヴォトですらその著『マーク・トウェインのアメリカ』で用い、その後、『ハンニバルのサム・クレメンス』の著者ディクソン・ウェクターも、ジムに対しマーク・トウェインが使わない呼び名を使っていると指摘する。それ以降もその系列は続き、レズリー・フィードラー、ケネス・リン、トム・クワァークもその作品論で踏襲しているという。ただし、そうしたなかにあって、1968年、ドナルド・ギブソンが、批評家は、ジムに言及する

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

際、頻繁に「ニガー・ジム」と呼んでいるが、実際には、ジムは一度も『ハックルベリー・フィン』のなかでそのように呼ばれていないと論じている例にも触れている。

このように特定の呼び名として悪しき慣例になってしまったのは、批評家の間だけではない。テレル・デンプシーが、ミズリー州歴史協会によって1934年、ハンニバルに立てられた記念碑に、長年にわたってそれが使われていたことを指摘している。それには、「ニガー・ジム」という呼び名だけでなく、「ニガー」のスペルまで間違っていたという不注意も重なっていた。デンプシーが1987年にそこを訪れた際にもその記念碑はあり、その後に、「ニガー」のことばが削られたという。なおも不満の訴えが続き、やがてそれは姿を消した。

作品の時代設定が南北戦争前の1835年から1845年までの時期とされ、その時代では差別語と認識されていなかった「ニガー」をめぐる問題が、今日まで尾を引く争点となっている。近年の議論の動向については後に考察するが、その前に、『ハックルベリー・フィンの冒険』の物語形式の独自性について確認しておきたい。アメリカ文学への最大の貢献となる、その作品の主要な魅力ともいえる点が、ハックルベリー・フィンの飾らない人間性をじかに伝える語り方にあると考えるからである。

2

この作品の形式の特徴が一人称のヴァナキュラーであることはすでに指摘され、十分論じられ、評価もされてきた。だが、その点をあらためて形式の面から見てみると、マーク・トウェインが当初ハックルベリー・フィンをトム・ソーヤーの物語形式とは異なる一人称を構想した際、ウィリアム・ディーン・ハウェルズに語ったように「ハックルベリー・フィンの自伝」を考えていたことが想起される。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

まず、語り手は、「マーク・トウェインさん」の書いた『トム・ソーヤーの冒険』の登場人物として、「読者」に語りかける。作中人物がその本から出て、作者を批評して、その本には、「大体は本当のこと」が書かれていると繰り返す。完全には真実でないと感じる語り手は、こんどは自分で本を書こうとするのである。だが、自分からは、名乗らない。ようやくそれが判明するのは、ミス・ワトソンが、綴りの勉強中のお行儀の悪さを注意し、「ハックルベリー・フィン」と厳しく叱りつける場面である。最初にハックの心根が明瞭に表れているのは、ダグラス未亡人が本を取り出し、モーセについて教える箇所である。どんな人物か知ろうと必死になるが、モーセがずっと前に死んでいることがわかって、ハックは、「死んだ人には興味がない」という。これは、無知というより、過去に関心をもたない性向を示している。ミス・ワトソンが始終うるさく小言をいうので、ハックは、孤独になり、死にたいと思うほど陰鬱な気持ちに沈み込む。そのことを語っているときでも、ハックは、星のまばゆい輝きを見、森のなかで木の葉がサラサラと立てる音を耳で捉えている。

ハックは、ひたすらどこかへ行きたいと願う。だが実際に、ハックの冒険の始まりは、父親との危険きわまりない生活に戻ったなかで、漂流してきたカヌーを見つけ、それを使って逃げ出すことを思いついたときである。それは偶然のことであったが、父親とダグラス未亡人の両方から追跡されない方法を考えるきっかけとなる。そしてつぎに、父親の命じた言葉がまさにヒントとなり、ハックは実行に移す。父親が町に出た間に小屋から必要な物をカヌーに運び、偶然みつけた野生豚を銃で仕留め、ハック殺人事件を装うため、斧で、戸を打ち破り、豚ののどをたたき切って、地面に置いて血痕を残す。このことを語っていくハックの口調から、トムのようにあらかじめ筋書きを考え、そのとおりに事を運んでいるのではない、状況が流動していくなかで「判断」し、行動するハックの姿が浮かんでくる。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

目的地をはっきりとジャクソン島に決めたのは、すべての準備を終え、月が昇るのを待つ間である。過去を回想していく語りにはない臨場感をもたらしているのは、知覚動詞が多用されていることにもよる。ハック独特の表現は、しばらく眠り、気づくと、すでに月は煌々と輝き、すべてが静寂に包まれていて、ハックが「夜が更けているように見えたし、夜が更けている『匂いがした』——言おうとしていることわかってくれるでしょう」と語るところに見出せる。「いま、この時」感じ取っていることをじかに伝えようとする言い方である。

こうしてハックは、ジャクソン島で逃亡してきたジムと偶然出会い、ふたりのミシシッピー川での旅は始まる。予断を許さない川の流れに沿って、切迫した事態に遭遇し、また時には人間社会の残酷な事件にさらされるなど、つぎつぎと直面する現実の試練のなかで、ハックは、心の曲折を刻々と伝えていく。

最後の43章は、手紙の結びの形をとっているが、その末尾において、元気になったトムが時計に関心をもって見続けているのを見て、ハックは、もう書くことはないことをひどくうれしいと語る。「一冊の本にすることがどんなに面倒なことであるとわかっていたら、取り掛からなかっただろう。もうこれからはそのつもりはない。」と、現在の心境を読者に打ち明ける。そして、いまは「テリトリーに逃げ出す」ことを考えていると語り、ハックの天性はいまも変わらないことを印象づける。

特徴的なハックの直覚的な語り方は、マーク・トウェインの『自伝』の方法と共通することに気づく。自伝というジャンルは、原則的に一人称形式で語られ、自分の過去を回顧するものである。ただし、いまの自分を成功者と見るか、失敗者と見るかによって、その因果をたどる方法は異なってくるであろう。そのため、通常、必然的に人生の始まりから今日にいたるまで、時系列的に語る方法を取る。マーク・トウェインがこうした方法

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

ではない、独自の方法を採用したことが興味深い。すなわち、いま心を捉えている興味あることを書き留めるという、過去から記憶を取り出すのではなく、現在心のうちに生起していることを語っていくという方法である。たえず変化する心に即して、自然発生的あるいは自動的に呼び起こされることが真実であるとする、まさに「オート」というべき自己の語り方といえよう。『ハックルベリー・フィンの冒険』は、ハックがすでに体験したことを、いまの心で語っている「自伝」であるともいえる。

3

前節でハックルベリー・フィンの「語り」の特質を分析し、作品評価を試みたが、この節ではまず、『ハックルベリー・フィンの冒険』の批評史において重要な影響力を及ぼすライオネル・トリリングに触れ、この作品の文学的意義を考察する。さらに、これまで批評史においてさほど言及されることのなかった作家ラルフ・エリソンを取り上げ、同じくその文学的意義を考察した論を見ていく。

『ハックルベリー・フィンの冒険』が文学作品として本格的に論じられるようになったのは、周知のように、1948年のライオネル・トリリングの論考からである。最高の評価を下した嚆矢となるその論で、トリリングは、『ハックルベリー・フィン』は、「正直であることの真実」と同時に、「道徳的情熱の真実」を有している、と評した。ハックの道徳的特性を重視したトリリングは、具体的にいくつかの面を取り上げる。「責任」がハックの性格の本質を成し、「ハックの同情心は、速やかに、即時的に働く」ことに注目するトリリングの念頭に、アメリカが南北戦争後、道徳的退廃を経験していったという問題意識があるといえよう。作品の道徳性を高く評価するとともに、表現形式と文体のすぐれた分析も行っている。簡明直截で、品位のある口語体を創造し、古典となる散文体を作り上げた文体の

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

巨匠として、トリリングはマーク・トウェインを賞賛するのである。第二次大戦を経て世界の大きな変貌を経験したトリリングは、南北戦争を経てアメリカが喪失した人間性の美しさを見事に表現した『ハックルベリー・フィン』を論じることにより、文学者の社会的責任の重大さを真剣に考えていたと思われる。

同様に、文学者の社会的責任を自ら問い続けた作家、ラルフ・エリソンのマーク・トウェイン観および『ハックルベリー・フィン』論を見ていくことにより、さらにその意義についての考察を深めたい。

エリソンは、1952年に『見えない人間』を発表したが、その作品を理解する上で参考となるのが、「社会、道徳性、小説」(1957) のエッセイであろう。そのなかで骨子となるのが、「変化」と「道徳」を軸とする19世紀小説と20世紀小説の比較考察である。その際、批判の矢が向けられているのは、批評家に対してであることも、わたしたちの関心をひく。元来、小説は、社会変化に対応して新しく出現した文学ジャンルであり、ことにアメリカのように、旧世界を脱し、新世界において民主的な社会を志向する国において、必然的に小説は、さまざまな変化の渦巻く「混乱」のなかで、「自分は誰であり、何であるか」を真剣に模索する傾向を強めた、とエリソンは説く。「独立宣言」、「合衆国憲法」、「基本的人権宣言」が含意する道徳的原理は、アメリカ人の意識の一部を成しており、また、作家の良心を形成していたと見るのである。

アメリカ人のアイデンティティの課題に取り組んだ作家として、ハーマン・メルヴィル、ヘンリー・ジェイムス、そして、マーク・トウェインを挙げる。これら作家たちと異なり、ロスト・ジェネレーションの作家たち、フィツジェラルドやヘミングウェイは、道徳的課題を避け、むしろ表現技法の実験に精力を費やした。批評家は、その業績を称えるが、現代の作家は、20年代の作家たちが直面しなかったことの「失敗」を忘れるわけに

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

はいかない、とエリソンはいう。作家の社会的責務への自覚を強く促しているのである。それというのも、批評家は、19世紀ヨーロッパの風俗小説と、ロスト・ジェネレーションの華々しい小説、という小説の歴史における栄光の時期は過ぎ、現代はすでに小説の没落の時期とみなしているためである。

エリソンは、さらに、作品解釈および評価の歴史において、奇妙なことに、原作のもつ肝心な「道徳的真実」という点がぼやけてしまう批評が影響力をもち、正当な作品解釈をゆがめてきたと指摘する。ヘミングウェイの『ハックルベリー・フィンの冒険』に関する評言は、あまりにも有名になったが、エリソンによれば、それは、ヘミングウェイが自己の立場を主張することが目的であって、その作品のまさに核心となる意味を削るものであるという。すなわち、ヘミングウェイは、ジムがハックとトム・ソーヤーに盗まれる箇所で『ハックルベリー・フィン』を読むのを止めるよう勧めているからである。エリソンは、ヘミングウェイが、この小説の「道徳的な点に盲目か、ジムを少なくも自由にすることを試みなければならないとハックが知る道徳的必然性を信じることのできない」ことが、その解釈にはっきりと示されていると論じる。トム・ソーヤーが登場して以降の作品の結末部に関するヘミングウェイの批判を受け継いだ批評家が、いかに多いことであろう。「ジムを盗んで自由にする」という明白な言葉を用いて、マーク・トウェインは民主主義の理念と奴隷制の現実との矛盾を抉り出し、ハックとトウェインの道徳的立場をはっきりと具現している、とエリソンは評価するのである。

「テリトリーに行く」というハックルベリー・フィンの最後の言葉を思わせるタイトルを用いたブラウン大学での講演（1979）のなかで、エリソンは、オクラホマ時代に出会った、ブラウン大学を卒業した最初のアフリカ系アメリカ人、インマン・ページについて語った後、じつは、そのタ

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

イトルがベッシー・スミスの歌う歌詞の一節であることに触れる。メーソン・ディクソン線によって「地理と自由」との関係を知っていた黒人奴隷には、「地理は運命」であり、ミシシッピー川の川下に売られることは、より過酷な奴隷状態であると知っていた。メーソン・ディクソン線を越えて北上することは、自由への逃亡であったが、エリソンは、旧インディアン・テリトリーの西部にも自由が見出せた事実に注意を喚起する。はじめは、インディアン・テリトリー、それからオクラホマ・テリトリーとして知られた「テリトリーは、五大インディアン部族の保護を求める逃亡奴隷の聖域」であったと語る。このことを知ると、ハックの「テリトリーに逃げ出す」という言葉は、いっそう深い意味をもってくるといえよう。

エリソンは、オクラホマで通っていたダグラス高校の校長に就任してきたウェスト・ポイント出身のジョンソン・チェスナット・ウィッテイカーについて語る。ウィッテイカーは、「白い」黒人であったが、その生まれは、サウス・カロライナの奴隷であった。奴隷解放によって、ウェスト・ポイントに籍をおくことができるようになったが、ほかの士官候補生から受けた暴行により、そこを去らざるを得なくなった。だが、それから法律の学位を取得し、開業した後、高校の校長となったのである。エリソンは、「民主主義の進行」の一例を、自分の出会った人物のなかに見ている。エリソンは触れていないことであるが、じつは、このウィッテイカー暴行事件のことを、マーク・トウェインはウェスト・ポイントを訪問した折、知っていた。その事件とウェスト・ポイントの放校処分に対する義憤を、マーク・トウェインはハウェルズに語っているのである。

エリソンは、アメリカ社会の民主主義の実現にむけての大きなうねりのなかで、自由を得た黒人たちが高等教育をうけ、社会的な活動へむかっていく姿と、そうした人々から受けた感化について語った後、アメリカ文学の本質的な問題に触れていく。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

アメリカン・スタイルの特質は「ヴァナキュラー」にあると、エリソンはいう。それは、文学形式をさすだけでなく、文化全般に及ぶものであり、過去の洗練されたスタイルに即興演奏で作り上げる今のスタイルが融合し、「民主化」していく「ダイナミックな過程」をさすと述べる。「現在の必要」に即応してそれまでにないスタイルを生み出す源泉が「ヴァナキュラー」であるということになろう。その意味で、それは「日常語」といった言葉のレベルを超えた概念として、エリソンは用いている。その典型として、エリソンは、マーク・トウェインに言及する。地域特有な話し言葉の要素から、独特なアメリカの文学表現を生み出し、アメリカ人の本質を把握する方法を教えたのが、マーク・トウェインであると語る。すなわち、エリソンは、「ヴァナキュラーの過程は、自分たちのナショナル・アイデンティティを確立し、発見する方法」であると説くのである。

4

『ハックルベリー・フィンの冒険』がアメリカ文学の古典であることを前提にさまざまな論議がなされてきたが、現代の変容するアメリカにおいて、その作品が内包する「モラル」を問い直そうとする批評が登場してきている。その有力な担い手は、アフリカ系アメリカ人の研究者や作家である。その背景には、過去30年あるいは40年にわたるアメリカ社会の激動のなかで、アフリカ系アメリカ人の発言力も増大し、アフリカ系アメリカ人研究が大学や出版界での関心の高い研究分野となってきているといったことがあろう。

その代表的な例として、*Black Perspectives on Huckleberry Finn* (1992) が挙げられる。そこに収められた "*Morality and Adventures of Huckleberry Finn*" を見てみよう。その論者ジュリアス・レスターは、論題が示すように、道徳性の観点からその作品を裁断する。その前提として、

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

文学とモラルは不可分の関係にあり、モラルが文学批評の基準であるという考えが表明されている。これは、トリリングやエリソンと共有する見解といえるが、レスターは、「黒人の親として、その本を禁書にしたい、少なくとも学校の必読リストから除外したいと思っている人たちに同感である。禁書には反対でも、『ハックルベリー・フィンの冒険』を読まないことによって、自分の子供たちの教育が向上することはわかっている。」といい、作品評価ではふたりとは反対の立場を取るのである。

従来の作品論の要は、ハックルベリー・フィンと黒人奴隷ジムの関係をどのように解釈するかにあるといえるが、レスターは、マーク・トウェインが描いたふたりの境遇の類似性を否定する。ハックは、小屋に監禁する酔いどれの父親に「奴隷状態にされる」が、ジムは、法制度に支持された所有者による法的な奴隷状態にあり、それらが対比されることによって、「奴隷制は恐怖であること」の事実を覆い隠してしまう結果になったと批評する。すなわち、トウェインは、奴隷制および黒人を真剣に考えていなかったことになるのである。

さまざまな文学作品に登場する黒人がどのように描かれるかというテーマで論じられる場合、従来一様に指摘されるのは、いずれもステレオタイプ化した黒人像であるという点である。ここでも、レスターは、ジムが「良いニガー」の原型であると断ずる。ジムは、子供っぽく、白人が望む黒人像ではない、自尊心や尊厳をもった大人に描かれていないとして、その人物像に不満を覚えている。

さらには、その作品論で最大の論点となってきたトム・ソーヤーによるジム救出劇演出の場面の解釈に関して、レスターは、マーク・トウェインが黒人をどれほど軽蔑していたかそこで明らかになっていると述べる。すでに論じ尽くされてきた感のある場面であるが、自由黒人となっていることを知りながら、トムがジムをわざわざ奴隷から自由にする「冒険」を仕

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

組んだ解釈上問題とされる結末部をさす。トムの望む「冒険」に必要な「玩具」にされているのがジムであり、人間として扱われていない、と述べ、レスターは、その点をさらに強調するため、ミス・ワトソンの遺言が、ジムだけを自由にするというものであり、ジムの妻や子供たちについていっさい触れていないことを指摘する。

レスターの作品解釈は、つぎの疑問に逢着する。奴隷の実際の生活に関心をもっていない作者の手になる『ハックルベリー・フィンの冒険』が、果たしてアメリカ文学の古典として認められるか。ハックルベリー・フィンが「文明」から逃れて、自由を求めたことは、マーク・トウェインの考える「自由」は、責任からの自由を意味している、とレスターは定義する。この作品を読む白いアメリカ人男性に、責任から自由であることがパラダイスであると思い込ませた責任をトウェインに問うのである。その点でこの小説は、モラル文学として失敗作であると、レスターは結論づける。

このようにマーク・トウェインの奴隷制に対する姿勢を告発したレスターは、『奴隷とは』（1968）という、元奴隷の語る物語を編集して奴隷制と奴隷解放後の黒人の生活の真実を浮き彫りにした著者でもある。その中心的資料となったのが、議会図書館に保存されていた、1930年代の連邦作家計画によって1940年に出版された『ヴァージニアの黒人』であった。歴史的には、アフリカの奴隷貿易は16世紀のはじめポルトガルが行なっていたが、その後イギリスやスペインにひろがっていった。そして、新大陸アメリカには1619年黒人奴隷20人がオランダ船によってジェイムスタウンに運ばれてくる。こうして奴隷貿易によって供給された労働力としての奴隷は、アメリカの歴史のはじめより存在していたが、やがて奴隷所有者が奴隷の身体と精神を完全に支配する奴隷制度となっていく。レスターは、その「プロローグ」で、ほかの国と比較して、合衆国の奴隷制度ほど残酷で、残忍なものはなく、アフリカ文化が破壊されたところはない、と

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

述べる。アフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティを基盤として、音楽や文学の分野で幅広く活躍するレスターであるが、『ハックルベリー・フィンの冒険』の解釈と評価は、奴隷制がどのように描き込まれているかという点に集約してなされていることは明白であり、従って、そこで言及される「モラル」すなわちマーク・トウェインの黒人観は、公平を欠くものとなっている。

つぎに、レスターと同様、その作品の偉大さに異議申し立てを行なっているジェーン・スマイリーの評論を取り上げたい。レスターはセント・ルイス生まれであるが、スマイリーは、ロサンゼルス生まれでセント・ルイス育ちの、ピューリッツア賞受賞作家である。それは、1996年1月の『ハーパーズ』誌に掲載された "Say It Ain't So, Huck: Second Thoughts on Mark Twain's 'Masterpiece'" と題されたものである。まず、『ハックルベリー・フィンの冒険』の評価を決定づけた偉大な批評家たちが登場した時期（1948－55）を「プロパガンダ時代」とスマイリーは名づける。T.S. エリオットと ライオネル・トリリングとレズリー・フィードラーに簡単に触れた後、こうした批評家の評価と異なり、その作品は偉大とはいえないという自説を述べていく。スマイリーは、作品の真の主題は、「ハックのジムに対する愛情と責任」であるという。ただし、この作品はその主題に沿った展開がなされず、小説として失敗であると見なすのである。

レスターの論旨と類似するが、スマイリーは、ハックとトウェインを同一視し、ふたりともジムの「自由への欲求」をまったく真剣に受け止めていないと批判する。その表れとして、ハックとジムがミシシッピー川を渡って自由州であるイリノイ州に行かなかったばかりか、そのことを考えることさえしなかった点を指摘する。「川を南下する」ことを選ぶのは説明がつかず、トウェインの "moral failure" であると断定する。すなわち、トウェインが「白人の少年と黒人との本物の愛情を口先では言いながら、」

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

ジムを人間としてではなく、ハックの脇役としてしか見ていないという。スマイリーの結論は、この小説が人種差別主義的であるとして、過去20年間に起こっている学校における禁書問題での禁書賛成の側に立つ人々に同調する意見となっている。後半の論は、スマイリーが『ハックルベリー・フィンの冒険』より偉大であると評価する『アンクル・トムの小屋』を取り上げ、奴隷制反対論者としてはっきりと奴隷制の悲劇を描いたストウ夫人を評価することに捧げられている。偉大な文学に何か目的があるとすれば、それは、ハックのように「テリトリーに逃げ出して」責任を回避するのではなく、立ち向かわせる助けとなることである、とスマイリーが述べている点も、レスターと同様である。両者が、マーク・トウェインとハックルベリー・フィンを奴隷に対する責任回避という点で同罪としていることは、別に言えば、それだけ『ハックルベリー・フィンの冒険』が教育上倫理的影響力を及ぼす作品として、偉大であると認知されていることを示しているともいえよう。

こうした執拗ともいえるトウェインに対する奴隷制をめぐる道義上の責任問題の追及に、当然ながら反論も出されている。2001年秋号の *Virginia Quarterly* に載った "Huckleberry Finn and the Problem of Freedom" と題するサンフォード・ピンスカーの論文がその例である。スマイリーが、『アンクル・トムの小屋』を『ハックルベリー・フィンの冒険』より優れた作品と評価したことに対して、差別的であるかどうかというプロパガンダを支持する立場の意見であって、「芸術」の観点に立っていないという批評を行なっている。『アンクル・トムの小屋』は、奴隷制反対論者の声明書であり、歴史小説としての価値はあっても、今日まで生命をもつ文学作品ではない、とピンスカーはいう。ここで想起されるのが、『奴隷とは』の「エピローグ」の最後に引用されている元奴隷の言葉である。「リンカーンは、おれたちを自由にしたことで、称賛を博しましたね。でも、ほんと

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

にかれはおれたちを自由にしましたかね？かれは、おれたちに、おれたちだけで生きてゆけるための機会は何ひとつ与えてはくれないで、おれたちに自由を与えてくれたんですよ。…『アンクル・トムの小屋』の作者のハリエット・ビーチャー・ストウだって、彼女があんな本を書いたのは、じぶんじしんのためだったんですよ。じぶんじしんの利益ということだけを胸に抱きしめてたんですよ。」『アンクル・トムの小屋』をめぐる各様の解釈は、『ハックルベリー・フィンの冒険』にも通じる、読み手おのおのの境遇、思想あるいは文学観に応じて読まれる文学作品の運命という問題に想到する。

5

1990年代を特徴づける評論として取り上げたジュリアス・レスターとジェイン・ スマイリーは、これまで見てきたように、黒人奴隷ジムに焦点をあて、ハックのジムに対する言動に批判の目を向ける内容であったが、「ハック・フィンの民族性」に関心を向け、文化論的分析をほどこしながら、ハックとジムとの親近性を考察する評論も登場している。これもやはり1990年代に顕著となる多民族・多文化主義の台頭を反映するものであろう。それは、1998年冬号の *American Literary Realism* に発表された "The Ethnicity of Huck Finn——and the Difference It Makes" である。その論者ヒュー・ドーソンは、ジェイムス・コルウェルの説を踏まえながら、ハックルベリー・フィンの名字の「フィン」は、*Finnegans Wake* などアイルランドの伝説や文学で用いられている同じ響きをもつ名前であることを紹介する。

ドーソンは、19世紀のアメリカ社会におけるアイルランド人観をたどる。19世紀にアメリカに移住してきたアイルランド人は、17世紀および18世紀に移住してきたプロテスタントのスコットランド系北アイルラン

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

ド人と異なり、カトリックであった。勤勉、清潔、教会出席、法律遵守などのプロテスタント倫理を身につけた“lace curtain Irish”は、“shanty Irish”とは階層を異にし、怠惰、不潔、無知とみなしていた。南部や東部で「白人のくず」といわれたアイルランド人に対する偏見や差別は、ミシシッピー川を越え、ミズリー州にまで伝わっていた、といい、ドーソンは、トウェインの父親もマーク・トウェイン自身にもアイルランド人蔑視が見られることを追跡している。当時のアイルランド人の社会的地位は、白人の最下層であり、それは黒人よりやや上の程度であったとされる。これまでの研究でハックのモデルは、トム・ブランケンシップであることは知られているが、ドーソンは、「フィン」という姓の点で、大酒飲みのハックの父親は、ハンニバルの酒飲みとして町の厄介者であったジミー・フィンを写したものであると主張する。トウェインが10歳になる前にジミー・フィンは亡くなったが、鮮明に記憶しているその人物について「手紙」などで語っており、大酒飲みのジミーの禁酒をめぐる町の人々の騒ぎぶりとその後の禁酒破りによる落胆ぶりは、たしかに作品の場面と符合する。ドーソンの研究によれば、怠惰、不潔、粗暴、頑迷な人種差別主義、無学で口汚い父親の性格描写は、当時のアイルランド人に対するアングロ・サクソン系のアメリカ人の見方を反映するものであった。

こうした父親像を前提として、ドーソンは、ハックとジムの関係をどう見るか、という本論に入っていく。そのような父親をもつハックは、逃亡奴隷ジムと同じく、人種的アウトサイダーであり、支配層から排斥されていたエスニック・グループの者であったという点に、ドーソンの主張は置かれている。そこにハックとジムの関係の親和性を見るのである。ミシシッピー川を下るふたりの旅は、歴史がアイルランド人と黒人に課した運命のメタファーであり、ふたりの逃走は、アメリカ社会の底辺層が共通して経験する苦境を象徴していると、ドーソンは解釈する。そして、社会的に拒

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

否され、あるいは、マーク・トウェインが意識下であっても偏見を抱いていた、類似した民族的特徴をもっていたハックとジムであったが、ハックが道徳的成長を遂げ、ジムの人間性を認めていったことは皮肉であると結んでいるのである。

『ハックルベリー・フィンの冒険』について、トリリングが「道徳的情熱」をあげ、また、エリソンが「道徳的真実」をあげ、ともに「責任」を重視しているのは、アメリカの精神文化としてのピューリタンの伝統が継承されていることを示すものであるといえよう。ふたりの文学者の精神は、アメリカ文学・文化の本流を探究しようとする真摯な姿勢に見られる。多民族国家としてのアメリカが強調されるようになった1990年代になって、アメリカ社会の主流ではなかった人種・民族の立場から、人種偏見や人種差別の歴史が確認され、それに対する責任問題を追及する論調が主流となった感がある。『ハックルベリー・フィンの冒険』がたえず時代の矢面に立たされてきた事実は、それが、学校で読まれるべき古典としてではなく、120年にわたるアメリカ社会の動向のなかで、生命を持ち続けた偉大な作品であることの証左といえるであろう。いつの時代でも、ハックルベリー・フィンの偽りのない心を語る口調から、人間的な真実があふれてくる魅力は尽きないにちがいない。

引用文献

Arac, Jonathan. *Huckleberry Finn as Idol and Target: The Function of Criticism in Our Time*. Madison: U of Wisconsin P. 1997.

Cox, James M. "A Hard Book to Take." *One Hundred Years of Huckleberry Finn*. Eds. Robert Sattlmeyer and Jo Donald Crowley. Columbia: U of Missouri P. 1985.

Dawson, Hugh J. "The Ethnicity of Huck Finn — and the Difference It

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

Makes". *American Literary Realism: 1870-1910* 30.2 (1998): 1-16.

Dempsey, Terrell. *Searching for Jim: Slavery in Sam Clemens's World*. Columbia: U of Missouri P. 2003.

Ellison, Ralph. *Going to the Territory*. New York: Random House. 1986.

——. *Invisible Man*. New York: Vintage Books. 1989.

——. *The Collected Essays of Ralph Ellison*. New York: The Modern Library. 1995.

Howells, William Dean. *My Mark Twain*. Baton Rouge: Louisiana State U P. 1967.

Leon, Philip W. *Mark Twain & West Point*. Toronto: ECW Press. 1996.

Lester Julius. "Morality and *Adventures of Huckleberry Finn*". *Satire or Evasion?: Black Perspectives on Huckleberry Finn*. Eds. James S. Leonard, Thomas A. Tenney and Thadious M. Davis. Durham: Duke U P. 1992.

Mason, Ernest D. "Attraction and Repulsion: Huck Finn 'Nigger' Jim, and Black Americans". *CLA Journal* 33 (1989): 36-48.

Pinsker, Sanford. "Huckleberry Finn and the Problem of Freedom". *Virginia Quarterly Review* 7.4 (2001): 642-49.

Smiley, Jane. "Say It Ain't So, Huck: Second Thoughts on Mark Twain's 'Masterpiece' ". *Harper's* 292.1748 (1996): 61-7.

Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination*. New York: Harcourt Brace Jovanovich. 1979.

Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. Berkeley: U of California P. 2001.

レスター，ジュリアス 『奴隷とは』岩波新書 1970.

NII-Electronic Library Service